

都心

心のふるさと 祈りのお山
高尾山薬王院

都内の天気

	きょう	あす
都区部		
府中		
八王子		

きょうの予想 (区内)
降水確率 朝0% 昼30% 晩50%
気温 最高36度 最低26度
北の風後東の風

ただ文房具など支援物資の盗難は日常茶飯事。ショールなどを織るために送った織機百台が盗まれたときには「もつがっかり」と苦笑する。でもシスターの「どこかで役に立ってるわよ」という言葉で続けた。今春、資金が尽き、秋からの新入生受け入れ中止も考えたが、現地の支援団体「社会組合」が事業を引き継ぐことになった。「NPOなどなかった時代に命がけで活動したシスターの思いがなくなる」と喜ぶ。

現地の経済自立のため、特産の金色のシルクを使った商品の開発を日本で試みるなど、常に心を砕いてきた。現在は地元大田区の町工場を通じて支援に取り組み。石が交じるため安く買えるコメを、自宅で簡単に精米できる道具の開発などに携わる。

一台の車から広がった支援の輪。三十三年前に贈った四駆は、今も現役で支援物資を運んでいるという。

(原尚子)

一台の車から広がる輪

「戦後のひもじい時代を知っているから、たまらない気持ちになって」

水質検査製品の会社を経営する多忙な身ながら、中学時代の同級生らと三十四年間、西インド洋に浮かぶ島国マダガスカルに少女たちの支援を続けてきた。最貧国で、女性特に影響を受ける。最もスムーズな自立の道は住み込みの家政婦のため、家事の技能を身に付ける職業学校の設立と運営を援助してきた。

マダガスカルの子供支援活動34年

岡内 完治さん(76) =大田区



支援の記録をまとめた会報や現地の学校の写真を前に、活動について語る共立理化学研究所の岡内完治会長(大田区)

「たまたま一台のために航路を変更し輸送してくれた」

「物支援助だけでは貧困から抜け出す手伝いにならない。教育が必要」と感じ、シスターが携わる職業訓練学校の支援を始めた。二〇〇二年に校舎を新設。年間三十〜四十人を受け入れ、これまでに千人以上が料理や縫製、織物などを学んだ。

マダガスカル支援 岡内さんらが始めた「マダガスカルのススター本間を助ける会」は、文房具やマシンなどさまざまな物資を送ってきた。現在は「タンテーリの会」。寄付の受け付けは郵便振替で「00100-8-600083」へ。

「たまたま一台のために航路を変更し輸送してくれた」

「物支援助だけでは貧困から抜け出す手伝いにならない。教育が必要」と感じ、シスターが携わる職業訓練学校の支援を始めた。二〇〇二年に校舎を新設。年間三十〜四十人を受け入れ、これまでに千人以上が料理や縫製、織物などを学んだ。

マダガスカル支援 岡内さんらが始めた「マダガスカルのススター本間を助ける会」は、文房具やマシンなどさまざまな物資を送ってきた。現在は「タンテーリの会」。寄付の受け付けは郵便振替で「00100-8-600083」へ。

従業員の健康づくり 合同で



企業対抗のチーム戦で綱引きをする参加者=大田区総合体育館で

大田区内16社、運動会

大田区内に本社を置く企業十六社の従業員ら約四百五十人が参加した合同運動会「おおた企業スポーツ祭り2018」が二十六日、大田区総合体育館であった。企業対抗での大縄跳びや綱引き、リレーといった競技などで得点を競った。

(山田祐一郎)

450人競技、組織活性化図る

従業員健康づくりを支援すること組織活性化させ、会社経営の向上につなげることを目的。区内には中小企業が多く、各社単独では運動の機会を設けにくい。地域でスポーツクラブを運営する団体を中心となって

合同運動会を企画した。昨年三月に続いて二回目の開催だ。

グループ企業や取引企業ごとに四つのチームに分かれて対戦。最後のリレーでは、男女が混合で全力疾走。転倒する参加者もいたり、最後尾から猛烈な追い上げを見せるなど、最後は大接戦となり、会場からは大きな拍手がわき上がった。会場ではまた、握力や垂直跳びなどの体力測定も行われ、数値が競技得点に加算された。

主催者によると前回は、後、参加者にアンケートを実施したところ、自身が勤める企業への愛着や信頼度を示す数値が上昇したとの結果も出たという。

運動会終了後は、懇親会もあり、参加企業の従業員同士が交流した。優勝チーム代表の建設会社サンユー建設の馬場宏二郎社長(同)は「運動会に向けて社員同士でスポーツをやるようになったり、仕事以上のつながりができ、一致団結できる」と運動会の意義を話した。

福祉避難所の設営に 地域の障害者も参加

荒川区で訓練



災害時に障害者や要介護者を受け入れる「福祉避難所」の開設計画が二十六日、荒川区立障害者福祉会館アクロスあらかわ(荒川区)であり、地域の障害者や住民も設営などに関わった。施設を運営する区社会福祉協議会(社協)によると、障害者が避難所設営に加わるのは珍しい取り組みという。

アクロスあらかわは、障害者らのサークル活動や会議などに利用されている。災害時には区の福祉避難所となるが、常駐職員は三、四人と少なく、地域住民が協力して設営する必要がある。

訓練には地元町会の昭和睦会や障害者のほか、区職員や消防署員ら百人が参加。震度6弱相当の地震発生を想定し、手伝いにつけた同町会メンバーと避難してきた障害者らが、間仕切りやエアマットを協力して設営した。写真。より実践に近づけるため、せりふの台本は用意しなかった。参加者は臨機応変に対応し、聴覚障害者と筆談ボードや身ぶりを交えてやりとりする姿もあった。

同町会は十一年前から、同施設との合同訓練を続け